

若林正博さん（伏見城研究会）

京都市伏見区でずっと育ってきた、若林正博さん。

生まれは昭和43年11月。地元伏見のことなら、美味しいパン屋さんから伏見城のことまで、あらゆることを知り尽くす、地域愛に溢れた歩く「伏見の辞典」みたいな方です。あと、草野球も大好きで「伏見ドリフターズ」というご自身で立ち上げた軟式野球のチームに所属されています。

若林さんの第一印象は、控えめで素朴で熱い。穏やかな雰囲気裏側に見え隠れする、未知数の底知れない何かスゴい大きなものを感じます。非常に謎のベールに包まれてもいます。一体普段どのように暮らしているのか？好きな食べ物？ご家族は？お仕事は？趣味は？etc……さあ、若林さんを質問攻めにして、ベールをはがしていきましょう！

お聞きすると若林さんの平日の朝は早いんですね。

6時30分に自宅の玄関を出るまでに、地元のお気に入りのパン屋さんのちょっと分厚めのトーストで朝食を済まし、朝の洗濯をパワフルに行って、京阪と市バスを乗り継ぎ職場に向かわれます。職場は左京区の某施設。そこで若林さんは、京都のあらゆる古い郷土資料をニーズに応じて、市民、大学教授、専門家、メディアなどに提供するお仕事をされています。いかに大事かを後世に伝えていかねばならない、先人の生きた証が残る貴重な資料を、館内の所蔵や全国各地から見つけ出してくる、とても素敵なお仕事です。

お仕事が終われば、ご家族のもとに真っすぐ帰られるそう。ご家庭での若林さんは、大学生と中学生の3人のお子さんがある、お父さんの顔も。

同い年の奥さんに、ご自身も好きなスイーツをお土産に買って帰る、優しい旦那さんの顔もお持ちです。

でも、もしかすると若林さんの顔が一番輝くのは、それは「伏見城研究会」で活動しているときかもしれません！！「伏見城研究会」とは、豊臣秀吉が晩年を過ごし、後に徳川家康が入った名城として知られる伏見城とその城下について調査、研究している伏見区の御香宮神社の三木善則宮司と考古学研究者らが昭和49年に立ちあげた歴史ある研究会です。

「伏見城」と付いているので、お城萌えなマニアの方の集まりかと想像していたのですが、そうではありません。確かに若林さんのお話は、マニアの方も唸るような、私など付いていけないほどですが、研究会のみなさんは真面目な歴史研究家の方々です。研究会の例会では毎回お題を決めて「琵琶湖疎水と伏見」「伏見発祥の寒天について」などさまざまなテーマに沿ってメンバーの方が互いに発表し、知見を広げていらっしやいます。

若林さんは、伏見にある地名「桃山」はいつの時代から使われ始め定着したのか、その由来を明らかにされ、成果を伏見城研究会で最近発表されました。地元伏見のひとでも知らないかもしれない、地名の由来まで調べ上げて発表する若林さん。

「知りたい」という地域愛の原動力となるものは何なのでしょう。最後にその原動力の秘密をお聞きしました。

若林さん「先人から受け継がれた、「まち」「営み」「息づかい」「在り様」を次の世代、またその次へと先人の生きた証をバトンにして、地域に腰を据えて根差し、多様性のある伏見の魅力をまちあるきや文献調査などを通して発見し続け、その素敵さを、伏見に住んでいるひとや来るひとに分かりやすく伝えていきたい。

伏見のスケールは大きく、自分の関わっていることの端が見えず果てもないが、それでもやることがどんどん広がっていくのは楽しい。

過去、現在、未来の伏見を愛する若林さんだからこそ、果てのない「知りたい」が原動力になるのですね。

2017. 1. 31

(文責：堀家 沙里)

